

シンガポール日本人学校における英語指導と実践

前シンガポール日本人学校チャンギ校 教諭

北海道釧路市立清明小学校 教諭 武山 謙太郎

キーワード 在外教育施設、シンガポール、小学校の英語、イマージョン、国際交流

赴任校の概要

シンガポール日本人学校チャンギ校

The Japanese School Singapore Changi Campus

<https://www.sjs.edu.sg/changi/>

1 はじめに

他民族が共生することで、さまざまな文化が混ざり合い、経済的にも大きく成長しているシンガポールは、多様な人々が円滑にコミュニケーションを図るツールとして広く英語が用いられており、その国で暮らしていくための外国語教育から学べる点は非常に多いだろう。日本人学校での取り組みを通して、日本国内での外国語教育にも活かせる点について考えていきたい。

2 外国語教育（英語）の取り組み

（1）週3回の英語の授業

チャンギ校では、入学してすぐの1年生から毎週3回英語科の授業が行われる。生まれてからずっとシンガポールで生活をしていてネイティブレベルで英語を話せる児童、来星（シンガポール訪問）直前までほとんど英語に触れてこなかった児童など実態は様々であるため、定期的にアセスメントテストを実施し、児童の英語レベルに応じたクラスで授業が行われる。講師は全て現地採用のローカルスタッフで構成されており、当然のことながらオールイングリッシュで授業が展開されていく。初めこそ戸惑ったり苦労したりする児童の姿も見られるが、次第にその授業スタイルに適応していく姿が非常に印象的であった。6年生の卒業間近になるとCEFR B1～B2程度のレベルにまで達する児童もあり、学校や生活の中で身近に英語に触れることが英語力を向上させていくのだと実感できた。



英語の授業風景。能力別の少人数のクラスで実施される。

（2）イマージョン水泳・音楽

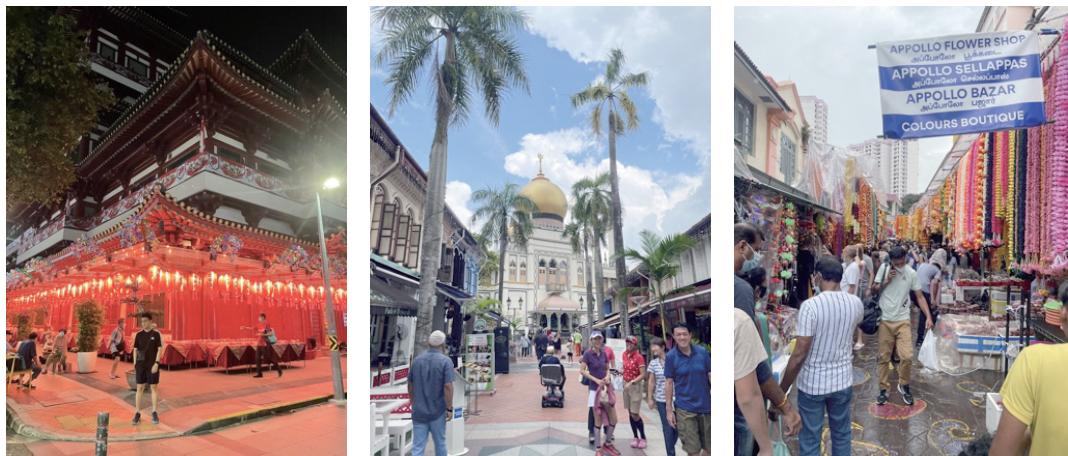
上述の英語科の授業に加え、特定の教科の指導を、第2言語のみで行う教授法である「イマージョン」という手法が、一部の実技教科の指導で取り入れられている。水泳の授業はどの学年も毎週1回ずつ設定されており、現地のスイミングスクールのコーチが外部講師として授業を執り行う。音楽は、教科書を用いた日本語での授業に加え、現地採用のローカルスタッフによるイマージョン音楽もカリキュラムに位置付けられている。

いずれの教科も実技教科であるため、言葉以外にも身振り手振り等から伝えられている内容を類推する児童の姿が多く見られた。ほとんど英語がわからない児童がいる場面でも授業を成立させるために、シンプルで分かりやすい指示や、学習活動のパターン化など、誰もが学びやすくなるような工夫が随所に散りばめられていると感じた。我々が行う通常の授業においてもこれらの工夫は重要だろう。

(3) 校外学習・現地校交流

シンガポールは治安が良いとされている国の1つなので、校外学習は比較的実施しやすかったように感じる。赴任1年目の4年生担任の時は、「民族理解」をテーマに据えた探求科基礎（総合的な学習の時間）の一環でチャイナタウン、アラブストリート、リトルインディアの3ヶ所へ訪れた。多くのシンガポール国民は、中華系・インド系・マレー系の民族にルーツをもつ。これらの方々の生活様式や文化について理解を深めるために、実際に街の中を散策した。気になったことや質問がある場合は直接聞いてみたり、文字を読んで情報を読み取ったりして情報を収集することで、学校で学んだ英語を実際に使用する機会となった。

赴任3年目の2年生担任時は、現地の小学生を学校に招待し、昔遊びをしたり校内と一緒に巡ったりする現地校交流を実施した。1年生に向けて書いた教室紹介ポスターを英語に書き換えたり、プレゼントとして作成した紙コップけん玉の遊び方を説明したりする活動を通して、英語を用いたコミュニケーションの場となるよう準備を進めていった。いざ当日現地の子ども達を目の前にすると、緊張した様子を見せる子ども達も多くいたが、一緒に時間を過ごすことで友達となることができ、最後は満足そうにしていた表情が印象的だった。正しく英語を扱うことも大切であるが、それ以上にお互いが歩み寄ろうとする姿勢こそがコミュニケーションの第一歩であることを再認識することとなった。



左から順にチャイナタウン、アラブストリート、リトルインディア

3まとめ

赴任直前までは外国語専科として小学生に英語を教える立場にあった私にとって、公用語が英語であるシンガポールにて教員として働けたことは、非常に学びの多いものとなった。赴任した当初、先輩の先生から「良くも悪くも日本の学校と同じようにできる」と言われたことがある。多くの日本人がシンガポール国内で暮らしているため、そのコミュニティの中でなら英語を使わずに生活できることや、日本食や日本製品も比較的手軽に入手することができるため、日本国内での生活スタイルと大きく変えることなく生活できることがその発言の背景にある。学校でも同じことが当たるため、「地の利を活かす」「外に働きかける」ということを特に意識してきた3年間だった。日常的に英語に触れたり意識したりできるように授業や単元を組み立てていくこと、様々な文化をもつ人々

が繋がる手段として英語が橋渡しの役割をしていることを実感させることを通して、児童生徒の英語力向上に努めていきたい。また、自分から英語を使って相手に働きかけていくことで、たくさんの現地の方々と親交を深めることもできた。自身の英語力の未熟さで伝えたかったことが伝えきれなかつたことも多くあり、悔しい思いもした。彼ら彼女らと再会した時に、今度はお互いの伝えたかったことをよりしっかりと伝え合うことができるよう、私自身の英語力の研鑽も日々の課題と捉えて学び続けているところである。